

みんなのデジタルリポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

イタリアの「家族の絆」 (特集：新しい家族像;
世界の家族意識)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-03-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宇田川, 妙子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00005878

世界の家族意識

イタリアの「家族の絆」

宇田川妙子

(中央大学助教授)

いつ頃から「家族の危機」が囁かれるようになったのか、いずれにせよ、今や家族が最も重要な社会問題の一つであることに誰も異存はないと思われる。しかし、その「危機」の中身とは一体何なのだろうか。

確かに「家族の危機」というと、しばしば少子化、晩婚化、離婚率の増加などの現象が指摘される。とはいえこれらは、産業構造の変化、教育費の高騰、個人の生活スタイルの変化、女性の意識の変化、高齢化等々という、家族のみならず、それをとりまく社会全体の変化の中で生じてきている現象でもある。社会全体が大きく変化すれば、その一部である家族も当然変化していく。世界全体を見渡しても、特に日本と似たような社会変化が生じている先進国においては、やはり家族をめぐって同様の現象が起きている。

とするならば、こうした現状は家族の「危機」では

なく、言わば歴史の必然として捉え直す必要があるだろう。そして我々日本社会においても、それらの現象を一つのきっかけとして、新時代に適合した新たな家族像を探っていくべきであり、その際、同様の変化にさらされている諸外国の試みを参考としていくことも有益だろう。しかし「家族の危機」とは、こうした変化だけを意味しているのではないと思われる。少なくとも日本の場合、現在の家族問題には、従来の家族像の崩壊だけでなく、家族の一員であることの意味自体が不明瞭になりつつあるという問題が含まれているように見える。それは、言い替えるならば「家族の絆の危機」という問題である。

ところで、こうした考えが私に浮かんできたのは、私が研究調査の目的で住み込んでいたイタリア・ローマ近郊のある町（R町と仮称しておく）での生活を通して

であった。

イタリアというと、マフィア映画などの影響のせいか、「大家族」というイメージを思い浮かべる人が多いに違いない。彼ら自身の諺の中にも「家族が一番、教会は二番、哀れな国家は三番目」というものがある。ところが、現在ではほとんどの世帯が核家族構成であり、「大家族」と言えるものはあまり見当たらない。R町でも、三世代家族は非常に少なかった。高齢者自身も、健康に問題がなければ独立した生活を望むため、老夫婦や寡夫・寡婦だけの世帯はごく普通に見られる。また一般的に独身率も非常に高く、最近では一・一七人という合計特殊出生率の極端な低さ（一九九五年の数値。ちなみに日本は同年一・四二人）が話題となった。

さてこうしてみると、イタリアの「大家族」とはもはや幻想に過ぎないと言われるかもしれない。しかも、以上のように徹底した核家族化とともに、結婚せず子供も生まず、といった状況は、日本以上に「家族の危機」に瀕しているようにも見える。ところが、彼ら自身はそれを「家族の危機」とは見做しておらず、あくまでも失業率の上昇や生活費の高騰によって結婚・出産が難しくなっているという経済的な問題や、高齢者であっても自由な生活を楽しみたいという意識の変化として捉えている。つまり、決して家族の意味や機能

が危機にさらされているわけではないのである。とするならば、彼らの家族は、確かに外見上は大きく変化しているが、彼らなりの「家族の絆」は依然として維持されていると言えるのかもしれない。

では実際に、彼らにとつての「家族の絆」とは何かを考えていくために、ある家族の事例を紹介してみることしよう。それは、一〇年ほど前私がR町を初めて訪れて以来、調査の度ごとに間借りをしている、Aさんという現在八〇才代半ばの老婦人の家族である。

Aさんは、四人の子供が全員結婚して独立した数年後、交通事故で夫を亡くし、以来独り暮らしを続けている女性である。糖尿病という持病があるため、子供たちは同居を勧めているが、彼女は一人のほうが気楽だと主張し、現在でも子供の世話になろうとしない。経済的にも彼女の独立心は高く、自らの年金のほかに、しばしば私のような間借り人をいれることによって生計の足しにしている。そんな彼女に、私はつい「あなたの家族は一人だけになってしまいましたね」と尋ねたことがある。しかし彼女は実に心外だという表情をして、「おまえは何もわかっていない。私には子供もいるし孫もいる」と反論してきた。

というのも彼女は、確かに独り暮らしだが、現在でも婚出した子供たちと非常に密接な関係を保ち続けて

いるからである。ことに、やはり町内に居住している二人の子供は、仕事帰りや買物の途中を利用して、ほぼ毎日母親のAさん宅を訪れているし、町外の子供からは頻繁に電話がかかってくる。また孫たちも、半分はこづかい目当てかもしれないが、度々祖母に会いにきており、隣町に住む孫が突然顔を出すことも少なくない。そして最も注目すべきは、日曜日のお昼になると、これらの家族全員がAさん宅に集まって一緒に昼食をとるという習慣である。その際、孫が婚約者を連れてくることもあるため、時には二〇人を超える「大家族」の会食となる。

このように日曜日ごとに、今は独立した住居を構えている子供たちが親の家に集まって昼食を共にするという光景は、R町ではごく一般的なものである。もちろん子供たちにとっては、自分の親だけでなく配偶者の親との付き合いもあるため、大抵は隔週の訪問になる。Aさんの子供たちも、義理の両親が遠隔地に住んでいる場合以外は、そうした方策をとっているが、日曜に來れない週には、その前日の土曜日の夕方にやっきて、Aさんと共に夕食をとることにしている。また、この日曜日の食卓には、Aさんの義理の姪二人（彼女の夫の妹の子供にあたる）が含まれているということも興味深い。この姪たちは、既に両親を亡くしていて、

五〇才代になった現在も独身のまま二人で暮らしているが、そのためAさんが最も近しい親族と見做されるようになったのか、両親の死後、この会食に加わるようになったという。そして今や彼女たちも、Aさんの家族の一員として認識されている。

さてこうしてみると、彼らの家族とは、我々のそれと外見上は大きな見えないように見えても、実は非常に異なっていることが明らかになってきただろう。まず彼らの家族は、食事を共にするか否かによって定義づけられていると言いうことができる。確かに日本でも、家族団欒というしばしば食事の場面が思い出されるが、日本の場合はそれ以上に、一緒に住んでいるか否かが家族の指標となる。例えば、日本の家族はイエという言葉で表現されることもあるが、イエとは言うまでもなく住居を示す言葉でもある。またその一方で、しばらく前に「個食（または孤食）」という言葉が話題になったように、近年、家族が一緒にゆつくりと食事をとるという機会は次第に少なくなりつつあるという。これに対してイタリアの家族は、たとえ離れて住んでいても、食事を通して絆を維持し続けているのである。

そしてさらに、こうした違いは、両者の「家族の絆」のあり方の違いにもつながっている。イタリアの家族の最大の特徴は、ただそれが食事の単位であるという

だけでなく、むしろそれを一つのきっかけにして、個々の家族成員が互いに先に述べたような密接な接触を続けているという点にある。このため彼らの家族は、見かけは核家族化しているようにとも、実質上は「大家族」として認識されているのであり、この意味で彼らの「家族の絆」は変わっていないと言えるだろう。ところが、そうした事例と比較すると、日本の家族の場合には、その指標が住居にあるせいか、個々の家族成員間の「絆」以上に、居住によって決定される「枠組」を重視する傾向がある。例えば日本では、一緒に暮らしていない祖父母と孫の間に、どれほどの接触があるだろうか。また、同じ屋根の下の家族の間でも、「個食」などの現象が示すように、互いの接触はそれほど多くないのが現状ではないだろうか。つまり日本の家族においては、そもそも共住という「枠組」の意識に比べれば、その中に住んでいる個々人の「絆」に対する関心は相対的に低いと言えるのであり、この点にこそ、現在の日本の家族が抱える根源的な問題点があると推察されるのである。

実際、近年我々の家族は、既に冒頭でも触れたように、次第に孤立化し、内部のコミュニケーションも不足がちになっていると指摘されることが多いが、これは、以上のような特質をもつ日本の家族が、人間関係

一般が希薄化しつつある現在、その「枠組」だけを一層形骸化させることによって生じた弊害であると見ることもできる。現在の我々の家族は、「枠組」だけを残して核家族化を進行させた結果、あまりにも外から見えにくい閉鎖的な集団と化してしまい、個々の家族成員も、何が「家族の絆」なのか掴めないまま、個々バラバラの状態に陥っていると考えられるからである。

とするなら我々は今こそ、家族の問題を「枠組」としてではなく、親子・兄弟姉妹・夫婦などの個々の家族成員の「絆」の問題として考え直していくべきではないだろうか。もちろんイタリアの家族にも、そのあまりに密接な家族関係が煩わしいなどの難点がないわけではない。しかし、それでもそうした彼らの家族と比較するならば、我々の家族の絆が非常に希薄であることは事実であり、やはりそこに日本の家族の「危機」の本質があると言わざるを得ないだろう。今後も家族をとりまく環境は大きく変化していく。ゆえに、その変化に柔軟に対処していくためには、これまでの家族の枠組にとらわれずに、むしろそうした集団的な考え方は一旦棚上げにし、個々人の「絆」という視点を重視することによって、そこから新たな家族を再編していく必要があるのではないか——私はR町の人々との生活の中でそう痛感したのであった。